

氏名	稲田 侑峰
ヨミガナ	イナダ イクオ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第477号
学位授与年月日	平成27年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 人間存在と彫刻 -立像にみる存在との距離- 〈作品〉 静かな立像 ひとりとふたり おだやかな立像

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	深井 隆
（論文第1副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	布施 英利
（作品第1副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	森 淳一
（副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	原 真一

（論文内容の要旨）

本論文は、人間の造形的な活動から生み出され続けてきた彫刻作品をはじめとする人間像について、人間と人間像との間に現れる「距離」に着目し、自身の生きてきた環境から生まれる人間存在を形に残すことへの考えを述べるものである。

古代より人間の姿を模してつくり出されてきた人型の像には、「存在の強さ」が内包されている。人型の像は、その時代、地域に根ざし、人々が信じるもの（宗教、自然観、死生観）など強固な物語をバックグラウンドに現実の世界において、その物語を実像化することに特化して存続してきた。その土台には、現実とイメージの世界を繋ぎとめる普遍のもの（教義）がある。

私は、人型の像とは存在することが発する強さと鑑賞する立場にある者との「距離」の変化に多様性とまだ経験したことの無い間合いを感じ取れることを期待している。

現在においても、人型の像はつくり出され続けている。私自身が多くの作家の作品（人間像）を鑑賞した折に、感じる共感。彫刻作品（立体）の特徴のひとつである鑑賞者との間に出来る物理的な距離と作品（人間像）が持つ精神的な距離の感覚に自分と周囲の距離感に感じ取れる空気感と人間の根源的な気質の部分を構成し、自身のイメージの根底に「かわき」という言葉を提示する。

この「かわき」は私と周囲の関わり方、距離感のイメージを総括するものとする。「かわき」から派生するものを取り込み、自身の人間像をつくり出す手段（カービング）の中にみる不完全性を自覚し、咀嚼することであられる絵画にみられる背景を踏まえた造形について作品形成の過程と交えて論じる。

そして、「かわき」からの造形の展開の先に見える自身の等身大の距離に立ち返った角度からの試作を行う。肖像性とイメージを結びつけ、「形の重さ」という点に重きを置き、作品を形成する。2つの試作を通しみえる人間（私）と人間像の心理的な距離について考察する。

本論文は全体を以下の3つの章によって構成している。

第1章では「人間像が持つ再現性とイメージの形」とし、人間と人型の像の接し方、関係する距離の変化を述べる。そこから、世界に残る人間像のあり方に目を向け、人型の像が生まれる環境をみつめ、自身の制作してきた人間像との「距離」を模索する。ここまでで、私が強く拘ってきたのは人型であるということである。人型の像から感じる、自己の作品の核をなす「存在の強さ」との関わりをどのように持つかということ

について手法と思考の面から述べていく。

第2章では「存在の強さと距離：かわきの中の間像」と題し、人間像を制作する中で自覚するようになった自身と人間像の係に「距離」をあげ、それに自身と人間存在への間合いを投影させた「かわき」という造語を当てる。

「かわき」は、私のあやふやな距離感に言葉を当てたものである。この感覚を明確にし、自作品に反映させることを目的とした造形の展開について触れる。他の作家の創作物にみる自己認識の仕方を読み取り、自身の試作の過程と照らし合わせ考えを整理する。また、その中でマジックリアリズム、メランコリーといった概念にふれることで創作の中に現れる潜在的な周囲との距離を意識的に作品に取り入れることを実践する。

そして、この章の総括として取り組んだ、人間を取り巻く景色を背負ったイメージからの造形によって「存在の強さ」と「かわき」の関わり方を自作品《かわきとひと》、《かわきの肖像6》、《かわきの肖像7》の試作から自身と人間像の距離に、存在の強さを求めながらも距離をおいて眺めたいという心情を自覚する。

第3章では「存在の強さと距離：「形の重さ」と「距離」として、第2章の「かわき」からの造形とは異なる角度から「存在の強さ」を考察する。

現実に存在する、または、した人間からイメージを増幅し、創作される肖像について日本の肖像作品を取り上げながら変遷を辿る。

人間像を表した作品群を眺めると肖像と並ぶ存在が自画像であろう。ここでは、絵画における自画像と彫刻における自刻像の差異に着目し、自身の人間存在への考えと手法を「形の重さ」に結びつける事で、私が人間像に対して持つ「存在の強さ」を求めながらも一定の距離を設けてそれを感じたいとする矛盾する感情を具体化する。この現実を感じたいと思いつつも遠巻きにしてしまう私と人間存在の「距離関係」を作品に反映させた博士提出作品《静かな立像》、《ひとりとふたり》、《おだやかな立像》を題材に作品形成の過程について言及する。

「むすび」では人間像を、私が認識する私、周囲が認識する私、それだけでは完結することが出来ない私というものとの対峙から生まれた自己認識の手段であると考え。その中で自分が人間について考え、人間の姿を形に残す。その過程から人間に対し、確かにそこにあるのに近づき方がわからない、近づく事に消極的になる感覚を覚える。ここに人間像の「存在の強さ」を求めながらも距離を置いて存在を感じたいという矛盾した思考を発見する。この近くになり過ぎない、遠くになり過ぎないという距離関係で人間存在を感じたい。そこから生まれる人間像に私の今のリアリティがある。

(論文審査結果の要旨)

本論文は、木彫の手法で人間像を制作してきた筆者が、彫刻の分野においてもっとも中心かつ普遍的なモチーフである「人体」の造形について、「存在」「距離」「重さ」といった視点から迫ったものである。

本論文は、全三章の構成となっている。まず第一章「人間像が持つ再現性とイメージの形」では、縄文時代草創期の土偶から論をおこし、縄文時代中期の、その立ち姿の佇まいが印象的な「西ノ前土偶」に言及しつつ、それを現代のプラモデルの「ガンダム」や、ロボットの「ASIMO」と比較し、とくに直立・歩行という観点から論じる。さらに古代エジプトや古代ギリシアの彫刻、ヨーロッパ中世の彫刻など、幅広い作品へと目を配りながら、そこで自己の作品を取り上げ、比較考察する。そのような論旨の展開によって、筆者の彫刻制作体験で培った眼と、それが見る古今東西の彫刻が交差し、彫刻における人間像というものが浮かび上がる。

次に第二章「存在の強さと距離」では、「かわき」というキーワードを選び出し、その視点からメランコリーなど人間の内面に関わる造形性へと論は進んで行く。筆者の彫刻作品の魅力は、世界から切り離された人体像であるだけでなく、その人物がいる周囲の光景の雰囲気までが浮かび上がるような、ある空間の中に存在する人物を想起させるところにあると評者(=布施)は評価しているが、本論文で使われる「距離」という用語は、その感覚を言い当てている。

さらに第三章では、人体彫刻における「肖像」ということに言及し、とくに自分をモデルとした「自刻像」という作品テーマについて論じる。絵画における自画像が、多くの画家によって描かれてきたが、なぜか彫刻における自刻像は、ほとんど作例がない。自分の姿を見るには、鏡や写真などを使用するが、それらは平面の世界である。そこに彫刻という立体による自刻像というユニークな可能性と、筆者の博士展での作品などの実践が示される。

彫刻における自刻像は可能か？人間存在と彫刻について論じてきた本論文は、そのような問題提起で、彫刻の新しい可能性と未来をかいま見させてもくれる。

このように本論文では、筆者の彫刻制作と伴走するように、論による考察と思考が展開されるが、そこでは言葉の力によってでしかなし得ない、彫刻制作とは別の、もう一つの研究がまとめ上げられている。

よって、本論文「人間存在と彫刻 -立像にみる存在と距離-」(稲田侑峰)は、本学の博士論文として評価でき、ここに合格とする。

(作品審査結果の要旨)

稲田侑峰はこれまで石や木を彫刻素材に用い、人間と人間像の間に現れる「距離」についての考察と制作を行ってきた。本研究では、物理的にも精神的にも曖昧模様な「距離」というものと作者の関係を探ることにより「かわき」という造語を導き出している。自身の根底にあるイメージと「距離」の総称として生まれた「かわき」という言葉は、作者・人間存在・彫刻の関係性を浮彫りにし、制作プロセスの中で有機的に機能しており、稲田の彫刻に固有の空間を与えている。

作品《静かな立像》は、作者が自分自身の姿と向き合った自刻像である。これまでの稲田の彫刻には、その時々テーマに添った最小限の動き(ポーズ)や量のデフォルメが与えられていたが、《静かな立像》にはほとんど動きが与えられておらず、自然な人間のフォルムが用いられている。両足を軽く開き、真正面を見据えた立像には、これまで稲田が立ち入っていなかった形への新たな掘り起こしが行なわれている。よりシンプルな「人間存在」と「かわき」へのアプローチにより、稲田の思想がストレートに反映された作品となっている。

作品《ひとりとふたり》は同一の台座の上に青年と老人の像が対となった作品である。同じような姿勢で佇む像は同方向に並列されており、それぞれの像の視線の先は交わることもない。二対の像の関係性は示されておらず、時間と空間の中に宙吊りにされている。また、正面性を強調することにより絵画との強い関わりが示されており、像の前後左右に広がる空間は彩色の無い彫刻に鮮やかさを与えている。

作品《おだやかな立像》は、作者が長い間意識的に制作を遠ざけてきた(理解の及ばない存在として)女性像である。この女性像にはモデルが存在し、これまで一定距離に保たれてきた作者と対象とのバランス関係が崩されている。目を閉じた女性像は、後方にわずかに傾き、両手を広げた姿勢で立ち、現実と夢のあわいが表現されている。「存在の強さ」「形の重さ」というものに重きを置いてきたこれまでの作品とは少し性格が異なり、「イメージの場面との融合」ということに取り組んだ作品である。これまでにないウエットさと軽やかさは、今後の作品の展開を予感させる。

以上3点の提出作品は表現、内容において学位授与に値すると審査委員全員に認められた。

(総合審査結果の要旨)

稲田侑峰君は、学部3年次には塑造で人間像を制作していたが、4年次より石彫を始めた。つまりモデリングからカービングへと技法を変えた。また同時に石彫とともに木彫も取り組み始めている。モチーフは常に人間像であり、石や木の素材生かした、存在感の強い作品を残してきた。修士課程では、黒御影石の大作を造り続けていた。博士課程に入り、1年次には黒御影石による等身大の立像を制作していたが、2年次か

らは木彫を主に制作し現在に至っている。人間像を造るということは、彫刻の本流とも言えるものであり、それゆえ、過去から現在まで多くの先例があり、そこに現代のリアリティを加えて新しい魅力的な表現をすることは、非常に難しいことであると思う。稲田君が自身と向き合い、現代における人間像の有り様を真摯に模索続ける制作態度は大いに賞賛されていだろう。2年次に木彫をメインにと決めた時は「マジックリアリズム」の絵画から発想を得て「かわき」という自身のイメージを展開した作品を制作していたが、3年次再び「存在の強さ」を意識した方向へ戻した。論文は、その変更を含めこれまでの自身の制作と、人間像を中心とした彫刻の歴史をうまく絡めて論を進めている。そのなかで、自身が自刻像を多く制作していることもあり、画家が自画像を描くこととの対比は、新しい視点があり注目に値する。

提出作品3点は、ともに鉄製の台座の上に立っている樟を素材とした裸像である。《静かな立像》は等身大の自刻像、《ひとりとふたり》は1mほどの若者と老人の像、《おだやかな立像》は40cmほどの女性像である。丁寧に彫り込まれた木彫は、強い存在感を感じさせる優れた具象彫刻である。鉄製の台座は、単に台座というものでなく、作品のフィールド、エリアを意識させ、見る人と作品の距離を限定する装置としての意味を持っている。3点を並べた大学美術館での展示も、空間を意識した優れた構成になっていた。

常に熱心に制作を行なっているひたむきな態度は、オーソドックスな彫刻の分野に、新しい表現を造り出そうという熱意に満ち、その結果として提出された人間像は、大変優れた彫刻であり、新しい具象彫刻として前進していることを感じさせるものである。

審査員一同、論文、提出作品ともに優れたものであると認め高く評価をした。